

# 接続助詞「から」とその習得研究の概観

木山三佳

## 1. はじめに

接続助詞「から」は、原因・理由をあらわす接続形式である。日常のコミュニケーションでも説明をする、相手に働きかけるなどの場面で使用されることが多い。

「から」には複数の用法があり、用法によって、文構造や使用される言語領域が異なる。「から」は、節を接続する接続助詞としての文法的な機能の習得だけでなく、場面に相応しい使用ができるという伝達能力を明らかにするのに適した言語形式である。

本研究では、「から」の研究を文構造と伝達能力の発達という観点から進めるために、これまでの「から」に関する先行研究を概観し、課題を整理する。

## 2. 意味的観点からの研究

### 2.1 意味的観点からの習得研究

意味的観点からの習得研究で「から」が分析項目として現れるのは、「寒くて窓をしめてください」のような、規範的には「から」があらわす意味内容を「て」形の形式を使って表す現象を分析するものに多い。

池尾(1963)は英語母語の学習者について、規範的には「から」があらわす意思や要求の理由を「て」形を使って表すものが多いことを指摘し、これが母語である英語からの転移であることを示唆している。

また、吉田(1994)は、中国語母語の台湾の大学生の75人分の作文564編と、60人分(約4時間分)の談話データにみられる意味的な中間言語的特徴を示す例の18.3%は、「ので」「から」で表すべき内容を「て」で表しているものであったとしている。

### 2.2 主観性や待遇性に注目した研究

「から」の意味の習得に関する研究では「て」との混乱が見られると指摘されているが、「から」の意味を記述する研究では、「ので」との比較が多くなされてきた。それらの研究では、「から」の特徴として、主観性と待遇性が注目されている。

永野(1952)が『「から」は、表現者が前件を後件の原因・理由として主観的に措定して結び付けられる言い方(p38)』として以来、「から」は主観的理由、「ので」は客観的理由と対比するのが一つの基準となっている(山内1970, 益岡1997等)。しかしながら、意味的主観性で言語形式を選択すれば「から」となるはずの場面で「ので」が使用されることもあり、語用論的待遇性も加えた2要因による体系で「から」と「ので」の特徴を明らかにしようとする研究が近年では多く見られる(花井1990, 尾方1993, 田中1996, 大竹2000, 山本2001)。

## 3. 構造的観点からの研究

### 3.1 構造的観点からの習得研究

「から」が使用される文構造の習得は、副詞節を持つ文構造の習得の研究の一部として行われてきた。田丸・吉岡・木村(1993)は、6名の学習者を約1.5年の間に、6回面接調査し、発話文が長くなる(単語数が増える)ことや、重層的なひろがり(埋め込み)が増すことを明らかにしたが、重文的な伸びは明らかにならなかった。

また、濱田(2000)は、日本へ留学している中国語母語とマレー語母語の大学1年生34人の作文145編の中から60件あまりの因果関係に関する誤用をとりだし分析した結果、そのうちの1割程度が原因、理由を表す従属節が2つ以上現れるもの(「て」の連続、「から」の連続など)であることを見出した。

つまり、学習者は複文構造を習得する過程で、複数の従属節を含む文を産出するようになるが、その際「から」を繰り返す傾向が見られるということになる。しかし、それが習得のどの段階で見られ、どのように規範的な組み合わせに近づいていくか、などは明らかになっていない。

### 3.2 主節との結びつきの強さによる従属節の分類

従属節を導く接続助詞を分類する研究の出発点となっているのは、南(1974, 1991)である。南は、従

属節内部に出現する文法的カテゴリーの種類と数によって、主節への依存度が高い従属節から、主節への依存度が低く一文に近い様相を見せる従属節までを、A から B,C という順で、三類の段階で分類している。そこでは「から」は主節への依存度が最も低い C 類に分類されている。南の分類に対しては、修正を提案する研究（田窪 1987, 長谷川 1998 等）もいくつかなされている。それらの研究でも「から」を含む節は、節として独立度が高く、より文に近い統語的な性格を持っているとする研究が多い。複数の従属節がある場合、「から」を連続すると一つの文としてのまとまりがつきにくくなる理由の一つは、この「から」を含む節の主節とのつながりの強さであると考えられる。

学習者には、このような複数の従属節の間の従属度について教示されることは少ないと思われるが、3.1 で言及された「から」を連続するという特徴と節の従属度についての教示との関連についての研究は、管見の限り見当たらない。

#### 4. 言語使用の観点からの研究

##### 4.1 言語使用の観点からの習得研究

「から」の用法ごとの産出順序について、言語使用の観点からの研究では、第一言語の習得を扱ったものと第二言語習得を扱ったものがある。

日本語の第一言語習得の事例研究である Clancy (1985) では、「から」の形式が最初に使用された例は、主節に相当する部分が言語化されないものであった。その次に見られるのが「どうして」の質問に対する返答に「から」をつけるもので、最も難しいのはコンテキストの助け無しに、連結された文の両方の節を産出する事である、としている。

木山(2002)では、自然習得環境にある学習者は、主節部分が言語化されない文末の「から」や、接続詞「だから」による単文の接続が、複文構造の「から」の使用より先に始まるという仮説をたてている。

大塚(2002)では、台湾人中国語母語の学習者9名の発話と母語話者10名の発話を調査した。従属節、並列節で終えている中途終了文は母語話者で全体の16%、学習者は来日直後では9%であったが、来日から半年後には14%となった。日本語教育では、複文構造のひとつとして「(原因)から、(結果)」の文型を初級段階で導入することが多いが、相手に働きかける「～から。」のような用法の日本語教育におけ

る扱いは様々である。文末の「から」の使用は、会話との接触によって増える可能性が示唆される。

##### 4.2 用法の定義とそれぞれの機能に関する研究

先行研究で定義されている「から」の用法を例文とともに表1にまとめた。

表1 先行研究による「から」の用法の定義

例文	先行研究の定義
勉強したから、合格した。	本来的用法 (白川 1991)
合格した。勉強したから。	先行文の理由をしめす (水谷 2000)
合格した。勉強したからだ。	原因理由を後から説明する (国立国語研究所 1951)
勉強したから。	あとに意見を暗示する (水谷 2000)
A: 合格した。 B: 勉強したから。	相手の発言に理由付けをする (水谷 2000)
A: どうして合格したの。 B: 勉強したから。	質問に答える (水谷 2000)

複文を構成する「から」を白川(1991)では「接続助詞の本来的用法」と呼んでいる。

「から」が文末に位置する単文となり、先行する主節にあたる文の理由を説明する場合、「から」は「先行文の理由をしめす」(水谷 2000)といわれる。

「合格した。勉強したからだ。」のような「から」も、原因・理由を後から説明する(国立国語研究所 1951)ものであるが、「から」が文末に位置しない点が構造的に異なる。

主節にあたる部分が言語化されない接続助詞について、高橋(1993)は、「から」「けど」「が」「し」を例にあげ、「理由」や「逆接」などのもともとの意味を引き継いで、「ことがら的な論理関係を表すだけでなく、話し手の聞き手に対するやりとり関係にかかわる役割も演じることになる (p22)」と文末「から」の機能が接続助詞性から終助詞性を帯びていることを指摘している。

また白川(1991)では、「から」が文末にきた場合の表現効果として、意思を告知する、新情報を告知する、反応を促す、の3つをあげている。

対話者間で、主節に相当する部分と「から」節相当部分をそれぞれ発話する用法について、Ford & Mori(1993)では、最初の話し手の言おうとしたことを理解していることを示す働きがあるとしている。

それぞれの用法における「から」の働きは明らかにされているが、本来の用法と呼ばれる「から」の習得と、主節を伴わない「から」の場面に応じた使用ができるようになることとの間に、どのような関連があるのかについては、明らかになっていない。

## 5. 結論

意味・構造的観点からの分析によると、学習者では、「から」の連続により理由を並列させる特徴がみられることがわかる。また、言語使用の観点からの分析によると、第一言語習得や自然習得環境にある学習者では、複文を構成する「から」の使用よりも先に文末の「から」が使用されるが、教室習得学習者では文末の「から」の使用は、会話との接触によって増える。

構造的にも言語使用のうえでも、原因の並列や、情報の付加という特徴が「から」の習得の過程で見られることから、今後は、書き言葉と話し言葉の習得に関する統合的な分析の枠組みを設定し、文法的な正しさにむかう過程と、場面にふさわしい使用へと多様化する過程の両方を明らかにすることが必要であると考えられる。

## 参考文献

- 池尾スミ (1963) 「「～て」 (-te form) について—いわゆる理由を表す接続形—」『日本語教育』3, 39-54
- 大竹芳夫 (2000) 「基準をあらわす情報 - 日本語の「で」と「ので」及び対応する英語の接続表現の意味と機能 -」『信州大学教育学部紀要』99, 45-56
- 大塚純子 (2002) 「日本語学習者の『共話型』談話への変化 - 台湾からの留学生の場合 -」『日本語学習者と日本語母語話者の談話能力発達過程の研究—文章・音声の母語別比較—平成 10～13 年度科学研究費補助金研究基盤研究 (B) (1) 研究成果報告書 課題番号 10480049』明海大学, 14-23
- 尾方理恵 (1993) 「「から」と「ので」の使い分け」『国語研究』明治書院, 844-861
- 木山三佳 (2002) 「フィリピン人学習者の「から」と「だから」の自然習得過程 - 文法化に注目して -」『第二言語としての日本語の自然習得の可能性と限界 平成 12～13 年度科学研究費補助金研究萌芽的研究課題番号 12878043』お茶の水女子大学, 12-22
- 国立国語研究所編 (1951) 『現代語の助詞・助動詞-用法と実例』秀英出版
- 白川博之 (1991) 「「カラ」で言います文」『広島大学教育学部紀要』2, 39, 249-255
- 高橋太郎 (1993) 「省略によってできた述語形式」『日本語学』12/10, 18-26
- 田窪行則 (1987) 「統語構造と文脈情報」『日本語学』6/5, 37-48
- 田中久美子 (1996) 「待遇表現からみた理由提示形式 - 「から」の制約を中心に - <日本語母語話者・学習者比較調査>」お茶の水女子大学修士論文
- 田丸淑子・吉岡薫・木村静子 (1993) 「学習者の発話にみられる文構造の長期的観察」『日本語教育』81, 43-54
- 永野賢 (1952) 「「から」と「ので」はどう違うか」『国語と国文学』2, 30-41
- 長谷川守寿 (1998) 「接続表現に基づく複文規則とそのグループ化」『文藝言語研究 言語篇』33, 31-46
- 花井裕 (1990) 「「ので」の情報領域 - 「から」との対話性を比較して」『阪大日本語研究』2, 57-81
- 濱田美和 (2000) 「原因・理由を表す接続表現 - 中上級日本語学習者の誤用例分析を通して—」『IDUN』14
- 益岡隆志 (1997) 『新日本語文法選書 2 複文』くろしお出版
- 水谷信子 (2000) 「日英語の談話の展開の分析 - 話しことばにおける接続表現を中心として -」『応用言語学研究』2, 139-152
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店
- 南不二男 (1991) 「現代日本語の従属句についての小調査」『日本語学』12/10, 62-77
- 山本もと子 (2001) 「接続助詞「から」と「ので」の違い - 「丁寧さ」による分析 -」『信州大学留学生センター紀要』2, 9-21
- 山内洋一郎 (1970) 「が・に・を・ものから・もの・ものを<から><ので><のに>」『国文学 解釈と鑑賞』11, 61-67
- 吉田妙子 (1994) 「台湾人学習者における「て」形接続の誤用例分析—「原因・理由」の用法の誤用を焦点として—」『日本語教育』84, 92-103
- Clancy, P. (1985) The acquisition of Japanese, In D. I. Slobin (Ed.) *The cross-linguistic study of acquisition: vol.1. The Data*, Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, 373-524.
- Ford, C.E. & Mori, J. (1993) Causal markers in Japanese and English conversations: a cross-linguistic study of interactional grammar, *Pragmatics*, 4:1, 31-61.